

逸題（篠原国幹）

馬を緑江に飲うは果して何れの日ぞ

一朝事去つて壮図差う

此の間誰か解せん英雄の恨

手を袖にして春風落花を詠ず

飲馬緑江果何日 一朝事去壯圖差
此間誰解英雄恨 袖手春風詠落花

解説 この詩は明治六年十月、征韓論が退けられ、西郷とともに郷里の鹿兒島に帰った後の作。征韓論の行なわれぬ不平と、日々の無聊を述べたもの。

語釈 ※逸題||無題、漫述、偶成などの意。

※緑江||鴨緑江。朝鮮と旧満州の境界を流れる大河。

※事去||征韓論破れての下野をいう。※壮図||さかんなるはかりごと。ここでは征韓をさす。※英雄||すぐれた大丈夫。ここでは自身をいう。※袖手||手をこまぬく。何もしないこと。

通釈 朝鮮に出兵して軍馬に鴨緑江の水を飲ませるのはいつの事であろうかと待っていたが征韓論は敗れて雄図も空しく鹿兒島の郷里に帰った。この大丈夫の無限の痛恨を誰が理解してくれるだろうか今は只、何もしないで春風が散らす桜花を詩に詠んでいるだけである。